北畠親房の天皇論

小林　道憲

北畠親房の天皇論

歴史の中の変わらないもの

建武の中興が挫折し、わが国が南北朝に分裂していた頃のことである。当時、北畠親房は、常陸の国小田城にあって、東国の武士に南朝方につくよう懸命に説得に当たるとともに、南朝の正統なることを説くために、『神皇正統記』を執筆していた。ところが、延元四年八月、南朝のあった吉野より、思いがけぬ知らせを受ける。後醍醐天皇の崩御の知らせである。親房の悲嘆あまりあり、『神皇正統記』の末尾で次のように記している。

「さても八月の十日あまり六日にや、秋霧にをかされさせ給てかくれましましぬとぞきこえし。ぬるが中なる夢の世は、いまにはじめぬならひとはしりながら、かずかずめのまへなる心ちして老泪もかきあへねば、筆の跡さへとゞこほりぬ。昔、『仲尼は獲麟に筆をたつ』とあれば、こゝにてとゞまりたくはべれど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申のべて、素意の末をもあらはさまほしくて、しひてしるしつけ侍るなり」と。

このような悲しみの中で成ったのが、『神皇正統記』であった。

『神皇正統記』は、神代における堯「天日継」は天壌無窮という天照大神の神勅から、皇位の窮まりなきことを説き、神代の昔から、皇位の継承が正理によって一貫して行なわれてきたことを説こうとしたものであった。『正統記』冒頭の有名な一文、

「大日本は神国なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国と云也。」

という親房の信念は、それを端的に現わしている。彼は、日本の

歴史の中で、一貫して変わらないものを、連綿として受け継がれてきた一筋の天皇の系譜にみたのである。しかも、そのようなことは、王朝の絶えず交代していたインドにもシナにもなかったことであり、わが国の歴史のみがもっている独自性だと考えた。君子の仁徳、君臣の道は、日本にのみ絶えることなくあり、それは、皇統が天照以来一筋に連なっていることによって保証されていると考えたのである。

どの国にも、祖先から子孫へと受け継がれていく生き方の連続性があり、それは変転きわまりない歴史を通して、なお変わらないものである。わが国は、この歴史において変わらないものを、一貫した天皇の系譜によっても表現してきたと言える。そのようなしかたは、確かに、日本独自のものであろう。連綿として受け継がれてきた天皇の系譜は、日本の同一性であり、アイデンティティなのである。

では、この日本の同一性であり、日本文化の連続性を保証する天皇の系譜は、どのようにして連続性を保っているのか。それは、ひとつには、血統の連続性であり、さらに、霊格における連続性であろう。大嘗祭の儀礼を解釈するなら、天皇の系譜は、ただ血統の連続性だけではなく、生きた人格としての天皇の生死にかかわらず、なお霊格において、天皇霊は歴代天皇によって連続して受け継がれてきたとみなければならない。しかも、それは、天照大神が天孫瓊々杵尊に授けた神勅に源泉をもっており、歴代の天皇は、日の御子として、天照大神の霊とひとつであると理解される。

この神話と儀礼に依拠した解釈は、必ずしも合理的なものではない。しかし、神話は、古代のわれらの祖先の世界観を表わすものであり、単に、非合理として捨て去ってしまうことはできない。国家には、なお、神話は必要なのである。親房が、日本の歴史の中で一貫して変わらないものを、一筋の天皇の系譜にみ、その源泉を神話に求めたのも、意味あることだと言わねばならない。

天皇は無私でなければならない

『神皇正統記』では、この天皇の系譜の一貫性は、歴代の天皇によって行なわれてきた三種の神器の授受によっても説明される。天照大神が、神勅とともに、「此宝鏡視ること、吾を視るがごとくすべし」とて、八咫鏡を天孫瓊々杵尊に授けられ、さらに、八坂瓊曲玉と天叢雲剣を授けられたことを、神話の中から引き出し、この三種の神器が歴代天皇によって次々と受け渡されてきたことが、皇統の正しく続いたことの根拠にしている。そして、それは、日月の正しく運行するかぎり失われず、天日継の栄は疑うことなしと言う。しかも、この三種の神器を解釈して、

「鏡は一物をたくはえず。私の心なくして、万象をてらすに是非善悪のすがたあらはれずと云ことなし。其すがたにしたがひて感応するを徳とす。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源也。剣は剛利決断を徳とす。智恵の本源也。」

とみる。ここから、天皇は、この三徳、正直・慈悲・智恵を合わせもたねば、天下は治まらないと説く。中でも、鏡が神器の根本であり、

「鏡は明をかたちとせり。心性あきらかなれば、慈悲決断は其中にあり。」

と言う。これは、親房独特の三種の神器の解釈であるが、特に鏡を正直の徳の象徴とし、この正直の徳こそ、国の統治に必要な徳であると考える。道の源は、心に一物もたくわえない虚心の境地にあり、己の欲を捨て、人を利することを先とし、鏡がものを照らすように、澄明で迷わぬ境地こそ、真の正道だと言う。

親房が、三種の神器の中で、鏡を第一にし、これを正直の本源とし、天皇がもつべき徳としたことは、天皇のあるべき姿を鋭く指摘している。天皇は、生身の人間には違いないが、その心は、鏡のように無私でなければならない。そして、あらゆる矛盾を統一し、相対立する様々の意見をすべて映し取る働きをしなければならない。

天皇の心は無であり、ひとつの場所であり、そこでは、天皇制反対論者の言論さえも可能になるようなものである。

かくて、天皇は、己が心の中に、日本の文化・政治・軍事・国民生活すべてを、大海原のように包含し、日本人の生き方の象徴、日本文化の全体性の象徴として、国民を統合する。文と武、菊と刀の帰一するところが天皇であり、その境地は、心に一物もたくわえぬ鏡のごとき虚心の境地でなければならない。天皇の本質へは、政治的な方向からでも、文化的な方向からでも、どこからでもアプローチできるが、いつも群盲象を撫でるように、その本質は十分にはつかめない。それは、天皇がもともと無であって、あらゆるものを映し取るものだからである。そのような私心のない鏡のごとき心境は、生きた人格としての天皇が絶えずそれに向かって修養を積み、努力すべき徳でもある。歴代のすぐれた天皇は、神道祭祀の励行や、お歌の修行、儒教や仏教の学問、古えの古典の勉学などを通して、そのような徳をもつべく努力してこられたのである。

昭和天皇の正直、慈悲、決断

昭和天皇も、この親房が語っている天皇のあるべき姿を具現した徳ある天皇であった。

例えば、昭和二十九年、北海道への御巡幸の折、当時、日本鋼管室蘭では労使が対立、長期争議中であった。労組は組合員達に赤旗や組合旗を持たせ、主婦達には首切り反対の白だすきをさせ、昭和天皇のお通りになる沿道を埋めスクラムを組んでいた。ところが、昭和天皇のお召し自動車が近づくと、その力強いスクラムも自然にほぐれ、期せずしてどこからともなく万歳の声が沸き起こったという。

また、同じ北海道御巡幸中、全駐千歳支部も生活保障を求めるストを予定し、米軍千歳基地正面にピケを張る予定であったが、そこを陛下のお車の通ることが分かると、委員長は、国民的立場に立っ

て、ピケ要員を歓迎体制に切り換え、混乱のないように指示したという。

御巡幸の際、激しい労働争議の真最中に工場御視察の日程が組まれたことは度々ある。例えば、昭和三十一年広畑製鉄所に行幸の時のことである。前日までの情報では、赤旗が林立し怒号やデモが渦まいているということであったが、陛下がおいでになったときには、掃き清められた工場に、社長、役員、組合委員長以下、整然とお迎えし、お言葉を待っていた。赤旗のアの字もなく、日の丸一色であったという。そのときの労組委員長は、「この日一日だけは休戦で、明日からは心を新たにして闘う」と語っていたという。

このような時、お付きの者達は、事前にはいつも、赤旗を掲げた労働組合員達の前に天皇をお連れすることを大層心配していたが、昭和天皇は、それを意に介することなく、「赤旗を掲げた組合員もそれぞれ訳あってのことであり、日本国民であって、心から会いたい」と言われ、それを実行された。昭和天皇は、国の父として、喧嘩の絶えない兄弟姉妹を一視同仁にみられる澄みきった〈親の心〉をおもちだったのである。この心が、また、組合員達にも通じたのだと言わねばならない。

天皇の心は、親房の言うように、万象を照らし、是非善悪の姿をそのまま映す無私・正直を徳としている。そういう仕方で、不徳な騒擾をもそのまま自らの心の中に包み込まれるのが、天皇なのである。今日も、われわれ下々の方では、国会でも、言論界でも、相変わらず切った張ったを繰り返し、喧嘩が絶えないが、天皇の鏡のごとき御心の中では、それらがいつもひとつに結び合わされているのである。

しかも、そのような心をおもちであれば、慈悲・決断は、おのずからそのうちにあることになる。

例えば、昭和天皇の二・二六事件での御決断や終戦の御聖断は、確かに、二・二六事件を起こした青年将校や、徹底抗戦を叫んでいた軍の一部にとっては、悲劇ではあった。しかし、その御決断は、

私心から出たものではなく、己れの欲を捨て、鏡のように透明な御心境から出た〈決断〉であったために、皆が従いえたのである。昭和天皇は、昭和二十年八月十四日の終戦の御聖断で、およそ次のように述べられたという。

「私自身はいかになろうとも、私は国民の生命を助けたいと思う。この上戦争をつづけては、結局わが国が全くの焦土となり、国民にこれ以上苦痛をなめさせることは、私として忍びない。……

私は、明治天皇の三国干渉のときの苦しいお心持を偲び、堪えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、将来の回復に期待したいと思う」と。

また、戦後の復興のために、国民を励ますべく、今上陛下自ら提案されて、敗戦の翌年から長い年月実行されてきた全国御巡幸は、人を利することを先とし、国民の身の上を思う堯慈悲槇の心から出たものであった。全国御巡幸を開始されるに当たって、昭和天皇は次のように言われたという。

「この戦争によって祖先からの領土を失い、国民の多くの生命を失い、大変な災厄を受けた。この際私は、私としては、どうすればいいのかと考え、退位も考えた。しかし、よくよく考えた末、この際は全国隈なく歩いて、国民を慰め、励まし、また復興のために立ちあがらせる為の勇気を与えることが自分の責任と思う」と。

昭和天皇は、明治天皇とともに、わが国の歴史上でも、まれにみる有徳の君であった。しかも、このような明鏡のような天皇の心は、歴代のすぐれた天皇がそれぞれにもってこられた心でもあったのである。

求められる徳ある統治

親房も、君主は善政を行うべしと、繰り返し言っている。そして、多くの天皇の事蹟をあげて、徳すぐれた天皇の善政を褒め讃

える。

例えば、嵯峨天皇については、幼少の頃から聡明で、読書を好み、諸芸を習い、また謙譲の度量を備えておられたこと、儒学に明るく、文章が巧みで書に優れ、仏教を深く尊崇し、天台・真言もこの御世から広まり、天下が治まったことなどをあげて、その有徳を称讃している。宇多天皇についても、仏教に帰依し、寛平の御遺戒を後の天皇のために書かれ、この御代こそ無為にして治まる聖代だと讃えている。次の醍醐天皇についても、聡明で事理に明るく、仁徳のある政治を行なわれたので、天下太平、民間安隠、世に言う延喜の治世が開かれたことをあげている。村上天皇についても、醍醐天皇に続いて賢明の誉れ高く、詩歌、文章、各種の技芸を愛好し、文化が栄えたことをあげ、天下の治まったことを讃美している。いわゆる天暦の治世である。

親房が有徳の君としてあげている天皇は、一般に、学問に優れ、和漢の故事に通じ、仏教を学び、諸徳を備えられた方と言えよう。そのような徳によってしか善い政治は行ないえないという儒教の徳治主義の理想を、掲げているのである。

逆に言えば、天子ひとり喜び、万民が泣くというのでは、天に背き、皇位の継承の資格はないとみる。従って、天皇が徳を備えず、誤り多ければ、その治世は短くなり、皇胤は絶えると言う。それは、天皇の不徳の致すところである。例えば、武烈天皇は、悪玉であったために、継子が絶え、そのために、群臣協議して、傍系の継体天皇を迎えたのは、正理にかなった皇位継承であったと言う。継体天皇は王者の風格をもち、天子の徳を備えた聖王であって、天照大神のおぼしめしにかなっている。他に、傍系に皇位が移った例、称徳天皇から光仁天皇への皇位継承や、陽成天皇から光孝天皇への皇位継承も、有徳の天皇へ皇位が移ったことであって、正理に即したことであるとみる。

『神皇正統記』は、神代以来、正理によって皇位が継承されてきたことを跡づけて、同時に、南朝を継ぐ後村上天皇に、徳を実

践し、立派な天皇になるべく教えようとした帝王学の書であったともみることができる。

昭和天皇も、青少年時代に乃木大将や杉浦重剛の薫陶を受けられ、多くの学問と歴代天皇の事蹟を学ばれ、徳を涵養されてこられた。

例えば、少年時代に、学習院からの帰り道、学習院院長であった乃木大将に偶然会われ、通学の方法を聞かれた。雨の日は馬車を使って通っていると答えると、雨の日も外套を着て通うようにと教え諭され、庶民と同じように質素にしなければならないことを学ばれたという。また、東宮御学問所では、杉浦重剛から倫理学を学ばれ、三種の神器や五箇条の御誓文や教育勅語の精神を学ばれ、帝王学を身につけられた。このようなすぐれた教育係の訓育と、祖父・明治天皇の御事蹟からも多くを学ばれ、昭和天皇は徳を積まれてこられたのである。

天皇は諸道を取り上げるべし

親房の天皇論は、記紀の伝承にある天照大神の神勅を基礎に据えているかぎり、神道思想を基盤にしている。しかし、だからといって、儒教や仏教を排斥する排他的なものではない。逆に、神道の基盤に広く儒・仏を受け容れ、偏ることなく、これらを共に尊ぶべきことを説く自由な考えであった。わが国の君臣は、神々の子孫であって、この理を悟れば、儒教も仏教も究極はこれと一致し、このようなわが国の国柄の本道を広めるにも、儒・仏の流布の力によるところが大きいと言う。また、三宝を敬い正法を広められた聖徳太子の高徳を讃えた上で、太子のつくった憲法十七條を、儒・仏の深奥を極めたものとして、高く評価している。

特に、天皇にあっては、諸道を取り上げ、よく学び、広く知るべきことが説かれる。ことに、仏教各宗派については、天皇は、どの宗派についても、大方のことを知って、いずれもないがしろ

にしないことが、国家の乱れを防ぐ道である。また、一つの宗派に志ある人が、他宗を非難したり、低く見たりすることは、大変な間違いである。人間の機根もいろいろであるから、教法も多種多様にある。自分はこの宗を信じるが、人は別の宗を信じており、それぞれに利益がある。まして、一国の君主たるや、いずれの教え、どの宗派も無視せず、あらゆる機会をつかんで利益の広まるように心がけるべきであると言う。

事実、三宝を感得された欽明天皇、仏教に篤く帰依し出家された聖武天皇、最澄・空海をシナに遣わし仏教を広められた桓武天皇、両大師に帰依するとともに諸宗の振興に努められた嵯峨天皇、法号をうけ仏道に励まれた清和天皇、真言を深く極めついに法流の正統となられた宇多天皇、大阿闍梨になられた後宇多天皇などの例をあげ、その徳を称揚している。

この天皇と宗教の問題についての考えは、当を得たものであろう。わが国は、昔も今も、信教に関しては、どちらからいうとルーズなくらい、自由であった。この〈日本的信教の自由〉についての親房の考えは、多様な価値の共存を認める日本文化の本質を突いていると言える。歴代天皇は、神道祭祀を務めとされ、心の支えともされてきたが、しかし、それは、他の宗派を排除するものではなく、むしろ、己が心鏡の中にどの宗派の教義も映し取るようなものである。天皇という鏡の中で、多は一になるのである。

さらに加えて、親房は、

「且は仏教にかぎらず、儒・道の二教乃至もろもろの道、いやしき芸までもおこしもちゐるを聖代と云べき也。」

と言う。人民の指導には、さまざまの学問・技芸みな必要である。いずれの学問・技芸も、それぞれなんらかの形で心の源を明らめ、正道に帰る手立てとなる。天皇の統治の道は、このようなさまざまの道を取り上げ、人民の困苦をなくし、争いごとのないようにすることに他ならないと言う。

昭和天皇も、生物学の御研究ばかりでなく、講書始の儀式では、

わが国有数の学者の話をお聞きになり、学問の発達を促されてこられた。また、歌会始では、国民各層の苦心の歌をお聞きになり、歌の道の興隆に尽くされてこられた。そればかりでなく、園遊会では、政・財界、文化・芸能界の代表や、特に社会的に功績のあった人々と会われ、親しく声をかけられてきた。のみならず、国民体育大会はもちろん、相撲や野球、果ては、三遊亭円生の落語、森進一や森昌子の演歌など、〈いやしき芸〉までも、心から御覧になって励ましてこられた。

天皇とは、政治ばかりでなく、国民生活すべてを総攬される方であって、総攬されてはじめて聖代と言えるのである。

二元統治形態が日本の伝統

親房は、天皇を中心として臣下がそれを補佐する政治形態を、神代以来の日本の理想的な政治形態として認めている。藤原氏の摂関政治を礼讃しているところをみれば、日本の政治形態が、権威の象徴としての天皇と、それを補翼する権力政治という二元形態を、伝統的な政治形態として認識していたとみてよいであろう。特に、摂関政治に関しては、極端に理想化されている。藤原氏が実際政治を握って、天皇統治を補弼してきたのは、遠く神代の約束ごとにまで遡ることができる。その上、鎌足以来、不比等、房前、冬嗣などは、大臣としてよく天皇統治を助け、善行を積んだために、藤原氏は、後、摂関家として栄えたと言う。

道鏡事件の時は、皇位継承の危機であったが、そこでも、和気清麻呂もさることながら、藤原百川の功績を褒めている。百川の計略によって、称徳天皇から光仁天皇への皇位の継承が行なわれ、正統に戻ったのも、百川の功績によるものと讃美している。

摂関政治は清和天皇の御代から始まり、良房が摂政となったが、この良房は、謙虚にして控え目、時には、天皇の間違った判断を諫め、忠節を尽くしたとみている。さらに、基経が、陽成天皇を、性

格荒々しく、およそ帝王の器にふさわしくないとみて、外戚であるにもかかわらず、自分の一門の利害を捨てて、廃位を決断、器量を備えられた光孝天皇を擁立したのも、国家のためを考えての立派な決断であったとしている。

確かに、日本の政治形態は、天皇を精神的権威とし、その横で、多くの政権が交代しながら実際政治を運営する二元政治形態をとってきた。この場合、天皇は、日本の同一性であり、日本国民の一般意志の表現であり、意志統合の象徴であった。この精神的部分を、連綿として絶えることのない天皇の系譜によって表現し、他方、現実政治の面では、国家の面している状況に合わせて、ある意味で、気楽に政権交代をやっていくことができた。日本の統治形態は、そういう柔構造をもっていた。天皇の系譜によって、日本の同一性は保たれるから、政治権力の部分で混乱があっても、いずれは収拾がつき、こうして、その時その時の状況に臨機応変に対処してきた。ある面では、経済的な政治運営をしてきたと言えるであろう。

日本は、祭政一致の古代的形態から、かなり早いうちに、祭と政、つまり権威と権力を分離した。そして、この権力の部分を、藤原氏が握ったり、あるいは、平氏や鎌倉幕府や室町幕府、信長や秀吉、江戸幕府など、武家政権が担当し、さらに、明治以後の藩閥政府、帝国憲法以後の政党政治、軍閥、戦後の自民党政府と、時と場合に応じて柔軟に対応してきた。しかも、その統治の正当性根拠を、いつも天皇という精神的権威に仰いできたのである。親房は、このような政治形態を、日本の伝統的な政治形態として認めていたと言えるであろう。もちろん、藤原氏の摂関政治を親房ほど礼讃できるかどうかは、藤原道長の横暴をみれば、必ずしも賛成はできない。その後の武家政権においても、多くの逸脱はあった。しかし、一貫して変わらない天皇の系譜だけは、日本の同一性として維持されてきたのである。

南北朝時代は、この同一性の部分が、あろうことか、京都と吉野の二つに分裂した時代であり、日本の長い歴史の中でも、あとにも

さきにもなかった危機の時代であった。この時代は、天皇のあり方そのものが、重大な問題として、人々の前に投げだされた時代だったのである。親房は、この危機状況にあって、天皇の正統とは何かを深く考え直すとともに、遠く公家による摂関政治を夢みたのである。

親房の求めた秩序ある政治

従って、親房は、足利尊氏の謀叛と戦っていたこともあり、これを念頭に、「武士たる輩、いへば数代の朝敵也」とみていた。しかし、だからといって、鎌倉以来の武家政治を完全に否定していたわけではない。彼は、むしろ、天皇の統治を、貴族と武士、文武両道がそれぞれ役割分担し、秩序正しく補う政治を理想としていた。だから、天皇統治を助けた武家政治、頼朝と泰時の政治については、口を極めて讃嘆している。

頼朝は、横暴を極め天皇を嘆かせていた平氏を滅ぼし、朝廷の鬱憤を散じ、天皇の悩みを解消した。この点で、鎌足以来の勲功を立てたから、朝廷から征夷大将軍に任ぜられたのである。だから、頼朝は、朝廷から政治を任されたという正当性根拠をもっている。院政による天皇政治の衰えから、兵乱相次ぎ、奸臣跋扈し、世は乱れ、民衆は苦しんだが、頼朝は、これを救って平和を回復した点で、功績があったと言う。

北条泰時も、その人柄、奢ることなく実直にして、朝廷を重んじて、正しい裁判と法の制定を行ない、武士としての分をわきまえ、仁政を行なったために、後、七代の北条氏治世が継続した。承久の変後、百年の平和の礎は、泰時によってつくられた。泰時が後嵯峨院を擁立したのも、天命正理に適したものであった。このように、臣下は、君を崇め、民を哀れみ、天を恐れ、心の汚きを反省し、行ないを正すべしと説く。

摂政・大臣として国事をあずかる者も、将軍・執権として兵馬の

権をあずかる者も、朝廷を重んじ、正路を踏まねば、運を全うすることはできない。天皇・公家・武家の秩序を守り、臣下がそれぞれ分を守るべきことを力説しているのである。これは、おそらく、南北朝分裂時の武士達への説得だったのであろう。兵馬の権をあずかる者、増長してはならず、公家一統の建武中興の精神にかえって、武士は忠誠を誓うべしと教え諭しているのである。覇権に対するみやびの優越である。今日のそれとは違うが、一種のシビリアン・コントロールを主張しているとも受け取れる。

むろん、天皇の廃立を、臣下である摂関家や幕府が決定することができるかどうかは、難しい問題である。親房は、悪玉の天皇が出た時には、天皇の血筋の中からそれ相応に徳のある天皇を擁立し、それに摂関家や幕府が関与してもよいと考えた。皇室の血統内でのこととはいえ、ある種の放伐思想を認めていたことにもなる。だが、この問題は微妙な問題である。日本の政治形態から言うなら、才徳ことのほか劣りたる天皇いでましし時でも、なお、これを象徴として仰ぎ、横の方で、摂政・関白・将軍・多数政党政府などが統治を行なっていくこともできるのである。そのような柔構造をもっているのが、日本の統治形態でもあった。現に、そういう不徳な天皇でなくとも、女帝や幼帝が立ったことは数多くある。その場合でも、摂政を立て、日本の政治はうまく作動してもきたのである。

危機の時求められる天皇親政

親房は、天皇政治を、公家・武士が扶翼する二元政治形態を、日本の伝統的な政治形態として認めていた。しかし、世の中が乱れて危機に陥った時の天皇親政の必要を認めなかったわけではない。実際、北条氏の衰退を機に起こされた後醍醐天皇を中心とする倒幕運動、および建武の親政については、彼自身中心的な役割を果たしたために、全幅の信頼をおき、そこから離反した尊氏を批判している。

親房によれば、後醍醐天皇は、各方面に造詣深く、真言にも深く

帰依し、他の宗派も擁護し、和漢の書に精通した有徳な天子であった。それ故に、聖運に恵まれ、武家政治を覆し、親政を開始することができた。後醍醐天皇とその系譜こそ、皇位の正統な継承者である。後醍醐天皇は、その親政にあって、記録所を設け、政務に励み、民の憂いに耳をかし、天下万民聖徳を讃え、ここに天皇政治が回復されたのだと言う。

日本の長い歴史をみると、対外危機や対内危機に面すると、王政を復古し、天皇親政の道を開くことによって難局を乗り越えるということが、何度か繰り返されてきた。南北朝以前でも、奈良遷都、平安遷都などは、やはり、一種の腐敗状況克服の努力であったと言えるし、その時、ある種の天皇親政が行なわれている。後鳥羽上皇が起こした承久の変については、親房は、まだ時期の煮詰まっていない時に起こされた倒幕計画であり、多くの過誤があったとみている。だが、それでも、それは、頼朝の血筋が絶え、鎌倉幕府の統治能力が失われた時に起こされた王政復古の企てではあったであろう。後醍醐天皇の建武の中興も、鎌倉幕府を受け継いだ北条氏の統治能力の喪失と、世の中の乱れという対内危機に対して、王政を復古し、天皇親政の道を開き、危機を克服しようとする試みであった。　幕末維新の対外危機でも、わが国は、西洋列強の来襲という国難に面して、統治能力を喪失した徳川幕府に代わって、王政を復古し、危地を脱することができた。昭和天皇の二・二六事件での決断や終戦の御聖断も、明治憲法の規定を破って、決断能力を失った軍や政府に代って、あえて行なわれた親政であった。

現政権の統治能力の喪失や国論の分裂が起き、どうにもならなくなった時には、多くの場合、天皇が表に出てきて、その精神的権威の部分で、難局を切り抜けてきたのである。いつまでも、天皇はシンボルにとどまっていたわけではない。現憲法の象徴天皇制は、天皇制の一面をみているにすぎないのである。日本の歴史は、危機においては、権威と権力を一致させ、危機克服とともに、それを分離してきた。危急存亡の時期はそれほど多くはなく、天皇親政の期間

もそれほど長くあったわけではない。しかし、重大な危機の時には、いつも天皇という日本の同一性が支点になってきたのである。

歴史の中の復古と革新

後醍醐天皇の親政は、その後まもなく尊氏の離反によってもろくも挫折、延元元年（建武三年）後醍醐天皇の吉野への脱出によって、わが国は南北朝に分裂、武士達の恩賞争奪戦が始まり、世の中はますます乱世となっていく。親房は、この時期にあって、南朝の復興と建武の親政への復帰を理想に、尊氏側との壮烈な戦いを挑む。後醍醐天皇崩御後は、吉野に帰り、後村上天皇の教育に当たるとともに、北朝との戦いをなお継続したが、戦い利あらず、正平九年、ついに憤死する。しかし、それでもなお、後醍醐天皇より後村上天皇に授受された三種の神器こそ、唯一の正統な君を保証すものと信じて疑わなかった。彼の最晩年は、すでに尊氏側の優勢は覆らず、ほとんど南朝の復興の可能性はなくなっていたのだが、この一途な信念だけは持続していた。九回裏十対〇でも、わが軍は必ず勝つと信じている強固な信念の持主であった。

親房は、歴史における変わらないものを信じ、必ず悪人は滅び、乱世はいつかは治まり、天は決して正理を踏みはずすことはないと信じた。いつも歴史には神慮が働き、日本は救われると信じていたのである。

しかし、その後の歴史の示すところによれば、南朝は、後亀山天皇に至って、北朝との和を講ずることになり、後亀山天皇は京都に帰られ、北朝系の後小松天皇に神器を譲られ、元中九年（明徳三年）、南北朝が統一されるに至る。南朝五十七年の歴史が終わったのである。親房の正統論からするなら、結果からみて、必ず、皇統は正理に帰ることになる。だから、この歴史の結果は、『神皇正統記』の理論から言っても、全く皮肉なことに、北朝系の後小松天皇が正統を継がれたということになる。親房は、この結果を知るよし

もなかったが、これは、彼にとって悲劇であった。

しかし、親房は、日本の南北朝分裂、武士の世の権力闘争うずまく乱世に、皇位の正統とは何かという問題を、神代にまで帰って考え、日本のアイデンティティを再び思い起こし、再自覚した偉大な思想家であった。危機の時代にこそ、歴史は古えに帰り、新しい生き方を見出そうとする。復古と革新、復帰と再生という歴史の大きなうねりの中に、後醍醐天皇の建武の中興もあり、親房の『神皇正統記』も生まれたのだと言わねばならない。

今日の皇室は、光厳天皇以来の北朝系の正統である。光厳天皇から後円融天皇まで、北朝五代の天皇方も、決して不徳な天皇であられたわけではなく、世の乱れをわが不徳のいたすところと、絶えず憂えてこられた方々であった。

昭和天皇も、戦前は、即位以来、軍閥の専横に悩まされ、大戦では多くの将兵や国民を喪い、さらに、未曽有の敗戦という日本の国難をただ中で経験され、戦後は、打ち続く食糧難と人心の乱れを、長年憂えてこられた。その御心痛あまりあるが、これを、ただひたすらな正直・慈悲の心によって乗り越えてこられた。その点でも、北朝系の天皇方に近い方であった。後醍醐天皇は、乱世の時代に、止むに止まれず、一種の革命家として、天皇親政を開始せんとされた方であったが、昭和天皇は、そういう革命家的素質はおもちではなった。むしろ、戦国時代に、人心が乱れ疫病の流行するのを憂え、『般若心経』を一心に書写し、国家安寧を祈られた後奈良天皇のような清明心をもたれた天皇であった。

時代時代に応じ、また、各天皇方のそれぞれの人柄を通して、多くの場合、日本の皇室は、まれにみる徳の伝統を一筋に受け継いできた。天壌無窮の天日継は、この徳によって維持されてきたのである。これこそ、わが国の歴史の中で変わらないものである。

埋もるゝ身をばなげかずなべて世のくもるぞつらき今朝の初霜

（後醍醐天皇御製）

治まらぬ世のためのみぞうれはしき身のための世はさもあらば
あれ

（光厳天皇御製）

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかな
らむとも

（昭和天皇御製）

北畠親房の天皇論

歴史の中の変わらないもの

建武の中興が挫折し、わが国が南北朝に分裂していた頃のことである。当時、北畠親房は、常陸の国小田城にあって、東国の武士に南朝方につくよう懸命に説得に当たるとともに、南朝の正統なることを説くために、『神皇正統記』を執筆していた。ところが、延元四年八月、南朝のあった吉野より、思いがけぬ知らせを受ける。後醍醐天皇の崩御の知らせである。親房の悲嘆あまりあり、『神皇正統記』の末尾で次のように記している。

「さても八月の十日あまり六日にや、秋霧にをかされさせ給てかくれましましぬとぞきこえし。ぬるが中なる夢の世は、いまにはじめぬならひとはしりながら、かずかずめのまへなる心ちして老泪もかきあへねば、筆の跡さへとゞこほりぬ。昔、『仲尼は獲麟に筆をたつ』とあれば、こゝにてとゞまりたくはべれど、神皇正統のよこしまなるまじき理を申のべて、素意の末をもあらはさまほしくて、しひてしるしつけ侍るなり」と。

このような悲しみの中で成ったのが、『神皇正統記』であった。

『神皇正統記』は、神代における堯「天日継」は天壌無窮という天照大神の神勅から、皇位の窮まりなきことを説き、神代の昔から、皇位の継承が正理によって一貫して行なわれてきたことを説こうとしたものであった。『正統記』冒頭の有名な一文、

「大日本は神国なり。天祖はじめて基をひらき、日神ながく統を伝給ふ。我国のみ此事あり。異朝には其たぐひなし。此故に神国と云也。」

という親房の信念は、それを端的に現わしている。彼は、日本の

歴史の中で、一貫して変わらないものを、連綿として受け継がれてきた一筋の天皇の系譜にみたのである。しかも、そのようなことは、王朝の絶えず交代していたインドにもシナにもなかったことであり、わが国の歴史のみがもっている独自性だと考えた。君子の仁徳、君臣の道は、日本にのみ絶えることなくあり、それは、皇統が天照以来一筋に連なっていることによって保証されていると考えたのである。

どの国にも、祖先から子孫へと受け継がれていく生き方の連続性があり、それは変転きわまりない歴史を通して、なお変わらないものである。わが国は、この歴史において変わらないものを、一貫した天皇の系譜によっても表現してきたと言える。そのようなしかたは、確かに、日本独自のものであろう。連綿として受け継がれてきた天皇の系譜は、日本の同一性であり、アイデンティティなのである。

では、この日本の同一性であり、日本文化の連続性を保証する天皇の系譜は、どのようにして連続性を保っているのか。それは、ひとつには、血統の連続性であり、さらに、霊格における連続性であろう。大嘗祭の儀礼を解釈するなら、天皇の系譜は、ただ血統の連続性だけではなく、生きた人格としての天皇の生死にかかわらず、なお霊格において、天皇霊は歴代天皇によって連続して受け継がれてきたとみなければならない。しかも、それは、天照大神が天孫瓊々杵尊に授けた神勅に源泉をもっており、歴代の天皇は、日の御子として、天照大神の霊とひとつであると理解される。

この神話と儀礼に依拠した解釈は、必ずしも合理的なものではない。しかし、神話は、古代のわれらの祖先の世界観を表わすものであり、単に、非合理として捨て去ってしまうことはできない。国家には、なお、神話は必要なのである。親房が、日本の歴史の中で一貫して変わらないものを、一筋の天皇の系譜にみ、その源泉を神話に求めたのも、意味あることだと言わねばならない。

天皇は無私でなければならない

『神皇正統記』では、この天皇の系譜の一貫性は、歴代の天皇によって行なわれてきた三種の神器の授受によっても説明される。天照大神が、神勅とともに、「此宝鏡視ること、吾を視るがごとくすべし」とて、八咫鏡を天孫瓊々杵尊に授けられ、さらに、八坂瓊曲玉と天叢雲剣を授けられたことを、神話の中から引き出し、この三種の神器が歴代天皇によって次々と受け渡されてきたことが、皇統の正しく続いたことの根拠にしている。そして、それは、日月の正しく運行するかぎり失われず、天日継の栄は疑うことなしと言う。しかも、この三種の神器を解釈して、

「鏡は一物をたくはえず。私の心なくして、万象をてらすに是非善悪のすがたあらはれずと云ことなし。其すがたにしたがひて感応するを徳とす。これ正直の本源なり。玉は柔和善順を徳とす。慈悲の本源也。剣は剛利決断を徳とす。智恵の本源也。」

とみる。ここから、天皇は、この三徳、正直・慈悲・智恵を合わせもたねば、天下は治まらないと説く。中でも、鏡が神器の根本であり、

「鏡は明をかたちとせり。心性あきらかなれば、慈悲決断は其中にあり。」

と言う。これは、親房独特の三種の神器の解釈であるが、特に鏡を正直の徳の象徴とし、この正直の徳こそ、国の統治に必要な徳であると考える。道の源は、心に一物もたくわえない虚心の境地にあり、己の欲を捨て、人を利することを先とし、鏡がものを照らすように、澄明で迷わぬ境地こそ、真の正道だと言う。

親房が、三種の神器の中で、鏡を第一にし、これを正直の本源とし、天皇がもつべき徳としたことは、天皇のあるべき姿を鋭く指摘している。天皇は、生身の人間には違いないが、その心は、鏡のように無私でなければならない。そして、あらゆる矛盾を統一し、相対立する様々の意見をすべて映し取る働きをしなければならない。

天皇の心は無であり、ひとつの場所であり、そこでは、天皇制反対論者の言論さえも可能になるようなものである。

かくて、天皇は、己が心の中に、日本の文化・政治・軍事・国民生活すべてを、大海原のように包含し、日本人の生き方の象徴、日本文化の全体性の象徴として、国民を統合する。文と武、菊と刀の帰一するところが天皇であり、その境地は、心に一物もたくわえぬ鏡のごとき虚心の境地でなければならない。天皇の本質へは、政治的な方向からでも、文化的な方向からでも、どこからでもアプローチできるが、いつも群盲象を撫でるように、その本質は十分にはつかめない。それは、天皇がもともと無であって、あらゆるものを映し取るものだからである。そのような私心のない鏡のごとき心境は、生きた人格としての天皇が絶えずそれに向かって修養を積み、努力すべき徳でもある。歴代のすぐれた天皇は、神道祭祀の励行や、お歌の修行、儒教や仏教の学問、古えの古典の勉学などを通して、そのような徳をもつべく努力してこられたのである。

昭和天皇の正直、慈悲、決断

昭和天皇も、この親房が語っている天皇のあるべき姿を具現した徳ある天皇であった。

例えば、昭和二十九年、北海道への御巡幸の折、当時、日本鋼管室蘭では労使が対立、長期争議中であった。労組は組合員達に赤旗や組合旗を持たせ、主婦達には首切り反対の白だすきをさせ、昭和天皇のお通りになる沿道を埋めスクラムを組んでいた。ところが、昭和天皇のお召し自動車が近づくと、その力強いスクラムも自然にほぐれ、期せずしてどこからともなく万歳の声が沸き起こったという。

また、同じ北海道御巡幸中、全駐千歳支部も生活保障を求めるストを予定し、米軍千歳基地正面にピケを張る予定であったが、そこを陛下のお車の通ることが分かると、委員長は、国民的立場に立っ

て、ピケ要員を歓迎体制に切り換え、混乱のないように指示したという。

御巡幸の際、激しい労働争議の真最中に工場御視察の日程が組まれたことは度々ある。例えば、昭和三十一年広畑製鉄所に行幸の時のことである。前日までの情報では、赤旗が林立し怒号やデモが渦まいているということであったが、陛下がおいでになったときには、掃き清められた工場に、社長、役員、組合委員長以下、整然とお迎えし、お言葉を待っていた。赤旗のアの字もなく、日の丸一色であったという。そのときの労組委員長は、「この日一日だけは休戦で、明日からは心を新たにして闘う」と語っていたという。

このような時、お付きの者達は、事前にはいつも、赤旗を掲げた労働組合員達の前に天皇をお連れすることを大層心配していたが、昭和天皇は、それを意に介することなく、「赤旗を掲げた組合員もそれぞれ訳あってのことであり、日本国民であって、心から会いたい」と言われ、それを実行された。昭和天皇は、国の父として、喧嘩の絶えない兄弟姉妹を一視同仁にみられる澄みきった〈親の心〉をおもちだったのである。この心が、また、組合員達にも通じたのだと言わねばならない。

天皇の心は、親房の言うように、万象を照らし、是非善悪の姿をそのまま映す無私・正直を徳としている。そういう仕方で、不徳な騒擾をもそのまま自らの心の中に包み込まれるのが、天皇なのである。今日も、われわれ下々の方では、国会でも、言論界でも、相変わらず切った張ったを繰り返し、喧嘩が絶えないが、天皇の鏡のごとき御心の中では、それらがいつもひとつに結び合わされているのである。

しかも、そのような心をおもちであれば、慈悲・決断は、おのずからそのうちにあることになる。

例えば、昭和天皇の二・二六事件での御決断や終戦の御聖断は、確かに、二・二六事件を起こした青年将校や、徹底抗戦を叫んでいた軍の一部にとっては、悲劇ではあった。しかし、その御決断は、

私心から出たものではなく、己れの欲を捨て、鏡のように透明な御心境から出た〈決断〉であったために、皆が従いえたのである。昭和天皇は、昭和二十年八月十四日の終戦の御聖断で、およそ次のように述べられたという。

「私自身はいかになろうとも、私は国民の生命を助けたいと思う。この上戦争をつづけては、結局わが国が全くの焦土となり、国民にこれ以上苦痛をなめさせることは、私として忍びない。……

私は、明治天皇の三国干渉のときの苦しいお心持を偲び、堪えがたきを耐え、忍びがたきを忍び、将来の回復に期待したいと思う」と。

また、戦後の復興のために、国民を励ますべく、今上陛下自ら提案されて、敗戦の翌年から長い年月実行されてきた全国御巡幸は、人を利することを先とし、国民の身の上を思う堯慈悲槇の心から出たものであった。全国御巡幸を開始されるに当たって、昭和天皇は次のように言われたという。

「この戦争によって祖先からの領土を失い、国民の多くの生命を失い、大変な災厄を受けた。この際私は、私としては、どうすればいいのかと考え、退位も考えた。しかし、よくよく考えた末、この際は全国隈なく歩いて、国民を慰め、励まし、また復興のために立ちあがらせる為の勇気を与えることが自分の責任と思う」と。

昭和天皇は、明治天皇とともに、わが国の歴史上でも、まれにみる有徳の君であった。しかも、このような明鏡のような天皇の心は、歴代のすぐれた天皇がそれぞれにもってこられた心でもあったのである。

求められる徳ある統治

親房も、君主は善政を行うべしと、繰り返し言っている。そして、多くの天皇の事蹟をあげて、徳すぐれた天皇の善政を褒め讃

える。

例えば、嵯峨天皇については、幼少の頃から聡明で、読書を好み、諸芸を習い、また謙譲の度量を備えておられたこと、儒学に明るく、文章が巧みで書に優れ、仏教を深く尊崇し、天台・真言もこの御世から広まり、天下が治まったことなどをあげて、その有徳を称讃している。宇多天皇についても、仏教に帰依し、寛平の御遺戒を後の天皇のために書かれ、この御代こそ無為にして治まる聖代だと讃えている。次の醍醐天皇についても、聡明で事理に明るく、仁徳のある政治を行なわれたので、天下太平、民間安隠、世に言う延喜の治世が開かれたことをあげている。村上天皇についても、醍醐天皇に続いて賢明の誉れ高く、詩歌、文章、各種の技芸を愛好し、文化が栄えたことをあげ、天下の治まったことを讃美している。いわゆる天暦の治世である。

親房が有徳の君としてあげている天皇は、一般に、学問に優れ、和漢の故事に通じ、仏教を学び、諸徳を備えられた方と言えよう。そのような徳によってしか善い政治は行ないえないという儒教の徳治主義の理想を、掲げているのである。

逆に言えば、天子ひとり喜び、万民が泣くというのでは、天に背き、皇位の継承の資格はないとみる。従って、天皇が徳を備えず、誤り多ければ、その治世は短くなり、皇胤は絶えると言う。それは、天皇の不徳の致すところである。例えば、武烈天皇は、悪玉であったために、継子が絶え、そのために、群臣協議して、傍系の継体天皇を迎えたのは、正理にかなった皇位継承であったと言う。継体天皇は王者の風格をもち、天子の徳を備えた聖王であって、天照大神のおぼしめしにかなっている。他に、傍系に皇位が移った例、称徳天皇から光仁天皇への皇位継承や、陽成天皇から光孝天皇への皇位継承も、有徳の天皇へ皇位が移ったことであって、正理に即したことであるとみる。

『神皇正統記』は、神代以来、正理によって皇位が継承されてきたことを跡づけて、同時に、南朝を継ぐ後村上天皇に、徳を実

践し、立派な天皇になるべく教えようとした帝王学の書であったともみることができる。

昭和天皇も、青少年時代に乃木大将や杉浦重剛の薫陶を受けられ、多くの学問と歴代天皇の事蹟を学ばれ、徳を涵養されてこられた。

例えば、少年時代に、学習院からの帰り道、学習院院長であった乃木大将に偶然会われ、通学の方法を聞かれた。雨の日は馬車を使って通っていると答えると、雨の日も外套を着て通うようにと教え諭され、庶民と同じように質素にしなければならないことを学ばれたという。また、東宮御学問所では、杉浦重剛から倫理学を学ばれ、三種の神器や五箇条の御誓文や教育勅語の精神を学ばれ、帝王学を身につけられた。このようなすぐれた教育係の訓育と、祖父・明治天皇の御事蹟からも多くを学ばれ、昭和天皇は徳を積まれてこられたのである。

天皇は諸道を取り上げるべし

親房の天皇論は、記紀の伝承にある天照大神の神勅を基礎に据えているかぎり、神道思想を基盤にしている。しかし、だからといって、儒教や仏教を排斥する排他的なものではない。逆に、神道の基盤に広く儒・仏を受け容れ、偏ることなく、これらを共に尊ぶべきことを説く自由な考えであった。わが国の君臣は、神々の子孫であって、この理を悟れば、儒教も仏教も究極はこれと一致し、このようなわが国の国柄の本道を広めるにも、儒・仏の流布の力によるところが大きいと言う。また、三宝を敬い正法を広められた聖徳太子の高徳を讃えた上で、太子のつくった憲法十七條を、儒・仏の深奥を極めたものとして、高く評価している。

特に、天皇にあっては、諸道を取り上げ、よく学び、広く知るべきことが説かれる。ことに、仏教各宗派については、天皇は、どの宗派についても、大方のことを知って、いずれもないがしろ

にしないことが、国家の乱れを防ぐ道である。また、一つの宗派に志ある人が、他宗を非難したり、低く見たりすることは、大変な間違いである。人間の機根もいろいろであるから、教法も多種多様にある。自分はこの宗を信じるが、人は別の宗を信じており、それぞれに利益がある。まして、一国の君主たるや、いずれの教え、どの宗派も無視せず、あらゆる機会をつかんで利益の広まるように心がけるべきであると言う。

事実、三宝を感得された欽明天皇、仏教に篤く帰依し出家された聖武天皇、最澄・空海をシナに遣わし仏教を広められた桓武天皇、両大師に帰依するとともに諸宗の振興に努められた嵯峨天皇、法号をうけ仏道に励まれた清和天皇、真言を深く極めついに法流の正統となられた宇多天皇、大阿闍梨になられた後宇多天皇などの例をあげ、その徳を称揚している。

この天皇と宗教の問題についての考えは、当を得たものであろう。わが国は、昔も今も、信教に関しては、どちらからいうとルーズなくらい、自由であった。この〈日本的信教の自由〉についての親房の考えは、多様な価値の共存を認める日本文化の本質を突いていると言える。歴代天皇は、神道祭祀を務めとされ、心の支えともされてきたが、しかし、それは、他の宗派を排除するものではなく、むしろ、己が心鏡の中にどの宗派の教義も映し取るようなものである。天皇という鏡の中で、多は一になるのである。

さらに加えて、親房は、

「且は仏教にかぎらず、儒・道の二教乃至もろもろの道、いやしき芸までもおこしもちゐるを聖代と云べき也。」

と言う。人民の指導には、さまざまの学問・技芸みな必要である。いずれの学問・技芸も、それぞれなんらかの形で心の源を明らめ、正道に帰る手立てとなる。天皇の統治の道は、このようなさまざまの道を取り上げ、人民の困苦をなくし、争いごとのないようにすることに他ならないと言う。

昭和天皇も、生物学の御研究ばかりでなく、講書始の儀式では、

わが国有数の学者の話をお聞きになり、学問の発達を促されてこられた。また、歌会始では、国民各層の苦心の歌をお聞きになり、歌の道の興隆に尽くされてこられた。そればかりでなく、園遊会では、政・財界、文化・芸能界の代表や、特に社会的に功績のあった人々と会われ、親しく声をかけられてきた。のみならず、国民体育大会はもちろん、相撲や野球、果ては、三遊亭円生の落語、森進一や森昌子の演歌など、〈いやしき芸〉までも、心から御覧になって励ましてこられた。

天皇とは、政治ばかりでなく、国民生活すべてを総攬される方であって、総攬されてはじめて聖代と言えるのである。

二元統治形態が日本の伝統

親房は、天皇を中心として臣下がそれを補佐する政治形態を、神代以来の日本の理想的な政治形態として認めている。藤原氏の摂関政治を礼讃しているところをみれば、日本の政治形態が、権威の象徴としての天皇と、それを補翼する権力政治という二元形態を、伝統的な政治形態として認識していたとみてよいであろう。特に、摂関政治に関しては、極端に理想化されている。藤原氏が実際政治を握って、天皇統治を補弼してきたのは、遠く神代の約束ごとにまで遡ることができる。その上、鎌足以来、不比等、房前、冬嗣などは、大臣としてよく天皇統治を助け、善行を積んだために、藤原氏は、後、摂関家として栄えたと言う。

道鏡事件の時は、皇位継承の危機であったが、そこでも、和気清麻呂もさることながら、藤原百川の功績を褒めている。百川の計略によって、称徳天皇から光仁天皇への皇位の継承が行なわれ、正統に戻ったのも、百川の功績によるものと讃美している。

摂関政治は清和天皇の御代から始まり、良房が摂政となったが、この良房は、謙虚にして控え目、時には、天皇の間違った判断を諫め、忠節を尽くしたとみている。さらに、基経が、陽成天皇を、性

格荒々しく、およそ帝王の器にふさわしくないとみて、外戚であるにもかかわらず、自分の一門の利害を捨てて、廃位を決断、器量を備えられた光孝天皇を擁立したのも、国家のためを考えての立派な決断であったとしている。

確かに、日本の政治形態は、天皇を精神的権威とし、その横で、多くの政権が交代しながら実際政治を運営する二元政治形態をとってきた。この場合、天皇は、日本の同一性であり、日本国民の一般意志の表現であり、意志統合の象徴であった。この精神的部分を、連綿として絶えることのない天皇の系譜によって表現し、他方、現実政治の面では、国家の面している状況に合わせて、ある意味で、気楽に政権交代をやっていくことができた。日本の統治形態は、そういう柔構造をもっていた。天皇の系譜によって、日本の同一性は保たれるから、政治権力の部分で混乱があっても、いずれは収拾がつき、こうして、その時その時の状況に臨機応変に対処してきた。ある面では、経済的な政治運営をしてきたと言えるであろう。

日本は、祭政一致の古代的形態から、かなり早いうちに、祭と政、つまり権威と権力を分離した。そして、この権力の部分を、藤原氏が握ったり、あるいは、平氏や鎌倉幕府や室町幕府、信長や秀吉、江戸幕府など、武家政権が担当し、さらに、明治以後の藩閥政府、帝国憲法以後の政党政治、軍閥、戦後の自民党政府と、時と場合に応じて柔軟に対応してきた。しかも、その統治の正当性根拠を、いつも天皇という精神的権威に仰いできたのである。親房は、このような政治形態を、日本の伝統的な政治形態として認めていたと言えるであろう。もちろん、藤原氏の摂関政治を親房ほど礼讃できるかどうかは、藤原道長の横暴をみれば、必ずしも賛成はできない。その後の武家政権においても、多くの逸脱はあった。しかし、一貫して変わらない天皇の系譜だけは、日本の同一性として維持されてきたのである。

南北朝時代は、この同一性の部分が、あろうことか、京都と吉野の二つに分裂した時代であり、日本の長い歴史の中でも、あとにも

さきにもなかった危機の時代であった。この時代は、天皇のあり方そのものが、重大な問題として、人々の前に投げだされた時代だったのである。親房は、この危機状況にあって、天皇の正統とは何かを深く考え直すとともに、遠く公家による摂関政治を夢みたのである。

親房の求めた秩序ある政治

従って、親房は、足利尊氏の謀叛と戦っていたこともあり、これを念頭に、「武士たる輩、いへば数代の朝敵也」とみていた。しかし、だからといって、鎌倉以来の武家政治を完全に否定していたわけではない。彼は、むしろ、天皇の統治を、貴族と武士、文武両道がそれぞれ役割分担し、秩序正しく補う政治を理想としていた。だから、天皇統治を助けた武家政治、頼朝と泰時の政治については、口を極めて讃嘆している。

頼朝は、横暴を極め天皇を嘆かせていた平氏を滅ぼし、朝廷の鬱憤を散じ、天皇の悩みを解消した。この点で、鎌足以来の勲功を立てたから、朝廷から征夷大将軍に任ぜられたのである。だから、頼朝は、朝廷から政治を任されたという正当性根拠をもっている。院政による天皇政治の衰えから、兵乱相次ぎ、奸臣跋扈し、世は乱れ、民衆は苦しんだが、頼朝は、これを救って平和を回復した点で、功績があったと言う。

北条泰時も、その人柄、奢ることなく実直にして、朝廷を重んじて、正しい裁判と法の制定を行ない、武士としての分をわきまえ、仁政を行なったために、後、七代の北条氏治世が継続した。承久の変後、百年の平和の礎は、泰時によってつくられた。泰時が後嵯峨院を擁立したのも、天命正理に適したものであった。このように、臣下は、君を崇め、民を哀れみ、天を恐れ、心の汚きを反省し、行ないを正すべしと説く。

摂政・大臣として国事をあずかる者も、将軍・執権として兵馬の

権をあずかる者も、朝廷を重んじ、正路を踏まねば、運を全うすることはできない。天皇・公家・武家の秩序を守り、臣下がそれぞれ分を守るべきことを力説しているのである。これは、おそらく、南北朝分裂時の武士達への説得だったのであろう。兵馬の権をあずかる者、増長してはならず、公家一統の建武中興の精神にかえって、武士は忠誠を誓うべしと教え諭しているのである。覇権に対するみやびの優越である。今日のそれとは違うが、一種のシビリアン・コントロールを主張しているとも受け取れる。

むろん、天皇の廃立を、臣下である摂関家や幕府が決定することができるかどうかは、難しい問題である。親房は、悪玉の天皇が出た時には、天皇の血筋の中からそれ相応に徳のある天皇を擁立し、それに摂関家や幕府が関与してもよいと考えた。皇室の血統内でのこととはいえ、ある種の放伐思想を認めていたことにもなる。だが、この問題は微妙な問題である。日本の政治形態から言うなら、才徳ことのほか劣りたる天皇いでましし時でも、なお、これを象徴として仰ぎ、横の方で、摂政・関白・将軍・多数政党政府などが統治を行なっていくこともできるのである。そのような柔構造をもっているのが、日本の統治形態でもあった。現に、そういう不徳な天皇でなくとも、女帝や幼帝が立ったことは数多くある。その場合でも、摂政を立て、日本の政治はうまく作動してもきたのである。

危機の時求められる天皇親政

親房は、天皇政治を、公家・武士が扶翼する二元政治形態を、日本の伝統的な政治形態として認めていた。しかし、世の中が乱れて危機に陥った時の天皇親政の必要を認めなかったわけではない。実際、北条氏の衰退を機に起こされた後醍醐天皇を中心とする倒幕運動、および建武の親政については、彼自身中心的な役割を果たしたために、全幅の信頼をおき、そこから離反した尊氏を批判している。

親房によれば、後醍醐天皇は、各方面に造詣深く、真言にも深く

帰依し、他の宗派も擁護し、和漢の書に精通した有徳な天子であった。それ故に、聖運に恵まれ、武家政治を覆し、親政を開始することができた。後醍醐天皇とその系譜こそ、皇位の正統な継承者である。後醍醐天皇は、その親政にあって、記録所を設け、政務に励み、民の憂いに耳をかし、天下万民聖徳を讃え、ここに天皇政治が回復されたのだと言う。

日本の長い歴史をみると、対外危機や対内危機に面すると、王政を復古し、天皇親政の道を開くことによって難局を乗り越えるということが、何度か繰り返されてきた。南北朝以前でも、奈良遷都、平安遷都などは、やはり、一種の腐敗状況克服の努力であったと言えるし、その時、ある種の天皇親政が行なわれている。後鳥羽上皇が起こした承久の変については、親房は、まだ時期の煮詰まっていない時に起こされた倒幕計画であり、多くの過誤があったとみている。だが、それでも、それは、頼朝の血筋が絶え、鎌倉幕府の統治能力が失われた時に起こされた王政復古の企てではあったであろう。後醍醐天皇の建武の中興も、鎌倉幕府を受け継いだ北条氏の統治能力の喪失と、世の中の乱れという対内危機に対して、王政を復古し、天皇親政の道を開き、危機を克服しようとする試みであった。　幕末維新の対外危機でも、わが国は、西洋列強の来襲という国難に面して、統治能力を喪失した徳川幕府に代わって、王政を復古し、危地を脱することができた。昭和天皇の二・二六事件での決断や終戦の御聖断も、明治憲法の規定を破って、決断能力を失った軍や政府に代って、あえて行なわれた親政であった。

現政権の統治能力の喪失や国論の分裂が起き、どうにもならなくなった時には、多くの場合、天皇が表に出てきて、その精神的権威の部分で、難局を切り抜けてきたのである。いつまでも、天皇はシンボルにとどまっていたわけではない。現憲法の象徴天皇制は、天皇制の一面をみているにすぎないのである。日本の歴史は、危機においては、権威と権力を一致させ、危機克服とともに、それを分離してきた。危急存亡の時期はそれほど多くはなく、天皇親政の期間

もそれほど長くあったわけではない。しかし、重大な危機の時には、いつも天皇という日本の同一性が支点になってきたのである。

歴史の中の復古と革新

後醍醐天皇の親政は、その後まもなく尊氏の離反によってもろくも挫折、延元元年（建武三年）後醍醐天皇の吉野への脱出によって、わが国は南北朝に分裂、武士達の恩賞争奪戦が始まり、世の中はますます乱世となっていく。親房は、この時期にあって、南朝の復興と建武の親政への復帰を理想に、尊氏側との壮烈な戦いを挑む。後醍醐天皇崩御後は、吉野に帰り、後村上天皇の教育に当たるとともに、北朝との戦いをなお継続したが、戦い利あらず、正平九年、ついに憤死する。しかし、それでもなお、後醍醐天皇より後村上天皇に授受された三種の神器こそ、唯一の正統な君を保証すものと信じて疑わなかった。彼の最晩年は、すでに尊氏側の優勢は覆らず、ほとんど南朝の復興の可能性はなくなっていたのだが、この一途な信念だけは持続していた。九回裏十対〇でも、わが軍は必ず勝つと信じている強固な信念の持主であった。

親房は、歴史における変わらないものを信じ、必ず悪人は滅び、乱世はいつかは治まり、天は決して正理を踏みはずすことはないと信じた。いつも歴史には神慮が働き、日本は救われると信じていたのである。

しかし、その後の歴史の示すところによれば、南朝は、後亀山天皇に至って、北朝との和を講ずることになり、後亀山天皇は京都に帰られ、北朝系の後小松天皇に神器を譲られ、元中九年（明徳三年）、南北朝が統一されるに至る。南朝五十七年の歴史が終わったのである。親房の正統論からするなら、結果からみて、必ず、皇統は正理に帰ることになる。だから、この歴史の結果は、『神皇正統記』の理論から言っても、全く皮肉なことに、北朝系の後小松天皇が正統を継がれたということになる。親房は、この結果を知るよし

もなかったが、これは、彼にとって悲劇であった。

しかし、親房は、日本の南北朝分裂、武士の世の権力闘争うずまく乱世に、皇位の正統とは何かという問題を、神代にまで帰って考え、日本のアイデンティティを再び思い起こし、再自覚した偉大な思想家であった。危機の時代にこそ、歴史は古えに帰り、新しい生き方を見出そうとする。復古と革新、復帰と再生という歴史の大きなうねりの中に、後醍醐天皇の建武の中興もあり、親房の『神皇正統記』も生まれたのだと言わねばならない。

今日の皇室は、光厳天皇以来の北朝系の正統である。光厳天皇から後円融天皇まで、北朝五代の天皇方も、決して不徳な天皇であられたわけではなく、世の乱れをわが不徳のいたすところと、絶えず憂えてこられた方々であった。

昭和天皇も、戦前は、即位以来、軍閥の専横に悩まされ、大戦では多くの将兵や国民を喪い、さらに、未曽有の敗戦という日本の国難をただ中で経験され、戦後は、打ち続く食糧難と人心の乱れを、長年憂えてこられた。その御心痛あまりあるが、これを、ただひたすらな正直・慈悲の心によって乗り越えてこられた。その点でも、北朝系の天皇方に近い方であった。後醍醐天皇は、乱世の時代に、止むに止まれず、一種の革命家として、天皇親政を開始せんとされた方であったが、昭和天皇は、そういう革命家的素質はおもちではなった。むしろ、戦国時代に、人心が乱れ疫病の流行するのを憂え、『般若心経』を一心に書写し、国家安寧を祈られた後奈良天皇のような清明心をもたれた天皇であった。

時代時代に応じ、また、各天皇方のそれぞれの人柄を通して、多くの場合、日本の皇室は、まれにみる徳の伝統を一筋に受け継いできた。天壌無窮の天日継は、この徳によって維持されてきたのである。これこそ、わが国の歴史の中で変わらないものである。

埋もるゝ身をばなげかずなべて世のくもるぞつらき今朝の初霜

（後醍醐天皇御製）

治まらぬ世のためのみぞうれはしき身のための世はさもあらば
あれ

（光厳天皇御製）

爆撃にたふれゆく民のうへをおもひいくさとめけり身はいかな
らむとも

（昭和天皇御製）